第5回京都市歴史的景観の保全に関する検討会議事録

- 1 日 時 平成27年1月28日(水) 午後2時00分から午後5時まで
- 2 会 場 ハートンホテル京都 2階 嵯峨
- 3 出席者 委 員：板谷直子委員，大庭哲治委員，小浦久子委員，
深町加津枝委員，松山大耕委員，宗田好史委員，門内輝行委員
※清水委員欠席，小浦委員 2時15分入室

事務局：松田都市景観部長，山本景観政策課長，小嶋景観政策課担当課長，
奥村風致保全課長，門川企画係長
- 4 次 第
開 会
議 題
  - (1) これまでの主な論点整理
【資料1】 これまでの主な論点整理(第1回～第4回検討会)
  - (2) 歴史的資産とその周辺の調査結果について
【資料2-1】 京都の景観における重要な要素とその周辺等における調査
エリア分布状況(景観規制)
【資料2-2】 京都の景観における重要な要素とその周辺等における調査
エリア分布状況(高度地区)
【資料2-3】 歴史的資産とその周辺の調査の取りまとめ例
【金閣寺，等持院エリア】
  - (3) 景観重要建造物等への指定に関する課題や対応策について
【資料3-1】 景観重要建造物等の指定候補の事例(神社)
【資料3-2】 景観重要建造物等の指定候補の事例(寺院)
  - (4) 歴史的景観の保全に関する課題と各課題への対応策
【資料4-1】 「現状と課題」の整理と「対応策」の検討
【資料4-2】 現状と課題の整理
  - (5) その他
・継続的な景観の点検手法について閉 会
- 5 配布資料
  - ・ 次第，委員名簿，配席図
  - ・ 資料1・2・3・4
  - ・ 参考資料
- 6 公開情報 傍聴者4名，報道関係者1名

(1) 開会

- ア 委員会の公開について報告
- イ 委員の出席状況について報告

- (2) 議題
- 1) これまでの主な論点整理
  - 2) 歴史的資産とその周辺の調査結果について
  - 3) 景観重要建造物等への指定に関する課題や対応策について

- ア 配布資料の「1. これまでの主な論点整理」,
- 「2-1. 京都の景観における重要な要素とその周辺等における調査エリア分布状況（景観規制）」,
  - 「2-2. 京都の景観における重要な要素とその周辺等における調査エリア分布状況（景観規制）」,
  - 「2-3. 歴史的資産とその周辺の調査の取りまとめ例」,
  - 「3-1. 景観重要建造物等の指定候補の事例（神社）」,
  - 「3-2. 景観重要建造物等の指定候補の事例（寺院）」, の内容を説明（京都市）

(補足)

・【資料3-1】について

(1 ページ) 神社の景観上の特徴は、社叢や鎮守の森といった、境内地に緑が多いことである。また、境内地が公開されていて、自由に一般の方が境内の中に入っていくことができるのが特徴である。そして、建物以外で景観を構成する要素としては、鳥居、玉垣、その向こうにある緑があると考えている。ただ、敷地の形状はいろいろあり、旗竿状の敷地の神社もある。

・【資料3-2】について

(1 ページ) 寺院の景観上の特徴として、境内地に「墓地」がある例が多く、神社と比べて緑が少ないという印象を受ける。また、境内地が公開されていない事例も多く、神社と異なり一般の方があまり自由に入れないお寺もある。建物以外で景観を構成している要素として、門、土塀、塀の奥に見える緑がある。また、塔頭寺院等を中心に、お寺が集積している事例も多く、それらが通りの景観をつくっているような事例もある。また、敷地の形状が旗竿状の敷地もあり、公共用の空地からは門だけが見えているような事例もある。

イ 案件について下記のとおり質疑応答及び討論

- 座 長：大変盛りだくさんな説明がありました。最初の「主な論点整理」はいいとして、次の「歴史的資産とその周辺の調査の結果について」をまず 15 分ぐらい議論し、

そのあと、「景観重要建造物等への指定に関する課題や対応策」について 15 分ぐらい、合計 30 分程度で、議論していただければと思います。それでは、最初の、「歴史的資産とその周辺の調査の結果について」何かご意見、ご質問はございますか。

○委員：歴史的資産とその周辺の調査の評価は、どこに出てくるのですか。

○京都市：まだ作業中のところもありますが、資料 2-3 で言いますと、17 ページ以降に、現地調査も含め気づいたところをまとめています。17 ページが、敷地内からの眺望、出入口部分の眺望、周辺からの見え方をまとめたものです。

18 ページに、大学キャンパス立地の影響をまとめています。等持院では、敷地の北側に立命館大学の衣笠キャンパスがあり、大学施設が少し見えることを調査結果としてまとめました。また、周辺には平成 19 年以降に風致地区に指定した地域もあり、同ページ右側には周辺の風致地区の町並みとして、そうした地域の現状をまとめています。

19 ページでは、金閣寺は観光地で、周辺に大規模な駐車場がある状況をまとめています。19 ページの下段に、新景観政策以降の許認可物件。新景観政策が形としてあらわれてきているのかをまとめています。まだ、われわれも作業中のところもありますが、このような形で、各エリアのまとめもしていこうと考えています。

○委員：このまとめの何を言いたいのですが。まさにこの検討会で議論する内容が、このまとめのフォーマットというか、評価をしていくことになる。例えば、世界遺産だと、世界遺産の保存管理計画に項目があるので、その項目に沿ったような書き方をする方がいいだろうし、それを定期的にモニタリングできるような指標をつくっておく。2007 年の景観政策導入以来、ガイドラインに沿って建てた建物が、今は数えていくと 5 棟あるが、それが 5 年後には 10 棟になりました。その結果がどうなっているかというような書き方など、いろいろあると思います。

せっかくの調査を、今後はそれを恒常的なものとして、歴史的景観あるいは世界遺産の管理ツールとして、どう展開するかという議論も少ししておく必要があると思いました。

それから、併せて、今のテーマと外れるかもしれませんが、参考資料で出していた、近代建築と社寺建築 360 軒の景観重要建造物の指定候補を、どのようにして選んだのですか。

○京都市：第 1 回の検討会でも報告していますが、近代建築については、正確には木造以外の近代建築です。基礎は文化財での近代化遺産調査のときに、調査の候補に挙げられたものの中から、木造以外の鉄筋コンクリート造とかレンガ造のものを取り

出したのが 321 件です。ただ、今回の調査で、滅失している事例が幾つか見つかっております。

社寺建築については、京都市で、市街地の緑被率等を調べた際に、その中に当然、お寺・神社の緑もあるので、そこから 636 件を取りだしました。その現地を調査しています。

○委員：社寺に関して、これ以外にもまだありますね。

○京都市：宗教法人としてのリストでは、数はもっとあるかもしれません。今回の調査では、京都市の既存調査において、GIS や住宅地図から取り出したデータがありましたので、それをベースに調べています。

○委員：それは、ほぼ一定規模の境内を備えている社寺は拾っているという理解でいいですか。

○京都市：そうです。

○委員：もっとありそうな気がします。

○座長：今日の資料も、調べた寺社の中から幾つかが挙げられていて、調べたものすべてではないので、全体の母集団の数や、どのぐらいのサンプリングで、その抽出基準をどうしたのかは気になるところです。たくさん資料があり、委員の皆さんもどこを開いていいのかわからないような状況だと思うので、事務局のシナリオと少し違うやり方で進めます。資料 4-1 を見ていただけますか。資料 4-1 を見ると、「現状と課題」の整理と「対応策」の検討という一覧表があります。今、地域分類別の課題ということで、これまで、最初に世界遺産のバッファゾーンについて議論し、その次に、山麓部にある歴史的資産とその周辺について検討しました。今日は、その 3 番目の、市街地に囲まれた歴史的資産とその周辺と取り上げることになります。

今まで、文化財の視点だと、お寺など歴史的な文化資産だけを取り上げてきましたが、景観という観点だと、境内の問題、その周辺のバッファゾーン、あるいはそこから見える景観など、周りも含めて文化財を見ていこうとなる。それは、文化財の中から外がどう見えるかと、外からどう見えるのかという、そういう視点で文化財を取り上げてみようというのが、今回の歴史的景観保全の問題です。今日取り扱っているのは、「1 地域分類別の課題」における (1) (2) (3) の、この (3) 市街地に囲まれた歴史的資産とその周辺という問題です。最後に (1) 世界遺産のバッファゾーンと (2) 山麓部にある歴史的資産とその周辺とを合わせて、それぞれ現状がどうで、どういう課題で、どういう対応策があるのかという

こと。しかも、その(3)の中でも、最初の資料2-1と2-2に出ていますように、いろいろなエリアがあるわけです。

調査が今、進行しつつあり、その中の1つの金閣寺の周辺だけを、ここにサンプルで挙げている。調査をするときに、こういう視点で調べているけれども、もう少し、調べたらいいことなどを教えて欲しいというのが、今の議論だと思います。最終的には、六十何箇所行われた調査の総体を見たいと思います。それを見て、もう1回、本当は議論しなければいけないのですが、今日は、全体の議論の流れとしては、地域類型別の(3)のところの話を見ている。

資料4-1の「2 景観の構成要素別の課題」を見ると、それぞれの中で、神社あるいは仏閣についてのコメントが出ていました。要素別の課題が1から7まで挙がっている。これは、今までの「1 地域類型別の課題」も併せて抽出しているのです。さらにそれぞれの要素や地域に対して、先ほど御意見があったモニタリングをすればしたら、共通のインディケータ、指標やインデックスなどを用意してはどうかと。そうしたものを用意していく上で、ベースになる調査を行っている。その途中の段階のようです。その中でできている部分が今回示されての議論ですので、少し最初の交通整理だけさせていただきます。

最後に資料4-1を全体でまとめて議論するという枠組を少し頭に置いた上で、今日の、市街地に囲まれた歴史的資産とその周辺の問題と寺社の問題の、どちらへ話が行ってもいいという形で議論したいと思います。それでは、先ほどまでの説明でお気づきのことやご質問、それがございましたら、どうぞ。

○委員：資料2-1に、何とかエリア、何とかエリアと書いていますよね。これは、これまで何回か議論した、二条城周辺や岡崎の辺りなど、そのセットと同じ単位と考えたらいいですか。これまではどちらかというと単体でしたが、今回、金閣寺・等持院エリアになっている。この調査の中には金閣寺と等持院の2つが入っていますね。どういう考え方で調査エリアの単位を決めているのか。

○座長：エリアの取り方の原理、まとまりの原理ですね。

○委員：そうです。一つは、一つひとつというのがあってと思います。金閣寺とか等持院とか、桂離宮とか。この金閣寺・等持院では少し違和感があります。これをまとめる意味が、単に距離が近いというのでは、少し違う気がします。例えば歴史的な問題や、地形的な問題、今の市街化上の何らかの問題など、何か共通でとらえるべき条件があるのでしょうか。今日は大変違和感がありましたので、念のため、全体の調査を進めるフレームとして、どのようにエリアを決めているのかを確認したいです。

○座長：それで言うと、ほかにも天龍寺・清涼寺・大覚寺エリアとか、妙心寺さんも別

の法金剛院と一緒にいますね。スケールで取っているのか、どういう基準でしているのか。半径何メートルでというような機械的に取っているのか、意味的に取っているのか。

○委員：私には違和感があります。

○京都市：実は、今年度当初、調査を計画するにあたって、敷地面積が 5,000 平米以上の大規模なお寺・神社を、まず取り出しました。そのとき、60 寺社以上ありました。その中で、今度は、非常に作業的な切り分けではありますが、半日から 1 日程度で現地調査ができそうな区切りで、エリアを設定しました。このように京都市の方で調査の仕方を、あらかじめ想定してリストをつくりましたので、調査を進めていくと、おっしゃるとおり違和感があります。実質、金閣寺と等持院は別々でまとめたような形になってきたりしています。61 エリアというのは、「500 メーター」などの基準ではなく、現地調査が 2 日にわたらない範囲ということで、作業の 1 日のボリュームを勘案して設定していました。

○委員：作業の段取りとしては、それでも全然問題ないですが、資料として作る時や、議論をする時には、それなりにきちんと論点に合わせたフレームに置き直さないといけないのではないかと思います。調査作業上の問題はもうお任せしますが、今回、その作業のままいくのですか、という質問です。

○座長：それは、データベースのまとめ方の問題でもあるので、例えば金閣寺エリアと等持院エリアに分かれても、それは問題ないでしょう。

○委員：私が疑問を持った理由は、エリアという概念でカルテを作っていくのと、各対象寺院あるいは対象建造物の周辺という概念とは違うと思うからです。そういう意味で、どのようなカルテを作っていくと考えているのか、ということです。これは大変重要で、その文脈の中では、時代性や関連性で少し離れていても、地形的なものや何かで、まとめてみた方がいいものもあるかもしれません。

○委員：それでいくと、まず、町家は全部分かっています。今度は社寺がほぼ全部分かったと言っている。近代建築も分かっている。だから、データベースとしては、歴史的建造物に関して、つまり、庭園の部分はかなりクリアになってきました。今度ここに、資料 4-1、地域類型別の課題があります。この地域類型と、大きなグルーピングと点があり、その中間に小浦委員がおっしゃる、どういうまとめ方をしたカルテを作っていく方が、モニタリングのときに便利かという話ですね。

○委員：そうです。

○委員：それで、この資料4-1の1の(2)は、もともと三山の麓にある社寺を守ろうという、概ね、京都市の景観政策で言うと古くからある風致地区です。(1)の世界遺産のバッファゾーンは、1994年に登場し、95年から市街地景観整備条例があります。その後、2007年に新しい景観政策ができ、今度は(3)の市街地全体にかなり厳しい景観規制が掛けられた。これは、景観政策の進化の過程でもあります。だから、(2)は、どういう経緯で風致地区や高さ規制が掛かってきたかも、データとして入っている。特に(3)の市街地に囲まれたというところを、今までは町家ということに切っていたが、今後、京都市としては、これだけ社寺が出てくると、もう少し何か新しいメニューを景観政策の中に取り入れていく。そして、どういうふうにしたら、町家もあるが社寺もある、お祭りがある、その有形と無形が一緒になったような、魅力的な歴史都市としてもっとできるかという議論になります。

だから、マンションを建てる場合でも、建て売り住宅を建てる場合でも、デザインに配慮するというだけではなくて、もう少しその社寺の地域性を意識する。ここは「上京だから」、「近景だから」、「室町時代に始まった町だから」、あるいは「平安時代の町割りだから」ということでデザインを決めていくというような途中に、(3)の課題はあたりませんか。つまり、どう見えるか、どう見られるかという問題をさらに踏み込んだ、新しいテーマが見えてくる。そして、それに則したようなカルテを作るとしたら、どういう地域割りがいいかということです。

○座長：眺望景観の制度を作った時にも同じような議論があり、どの範囲までを近景と考えると、どの範囲から遠景と考えるかという議論がありました。例えば、清水の辺りで、参道がずっと伸びた形で500メートルを超えても、エリアとして算入したらいいという意味論的なエリアの取り方もありますが、最初は、500メートルという、かなり、どちらかという構文論的な切り方で、機械的に切っています。やがて、それをベースとして、次は各エリアで意味的なものを入れていこうという動きが、今は出てきています。だから、その辺の意味的なものは、おそらく、行政なりで機械的に決めるというよりは、周りのコミュニティ、当事者やその周りの人たちも含めた形で、最終的には考えていかざるを得ないです。

○委員：コミュニティも一つですが、都市の観点から、この町の成り立ちをどう見るかという歴史学的な部分というのは極めて大事です。

○座長：そうした歴史も含めて、どう切っていくかは、かなりそれぞれの個性があります。だから、今のまとめ方は、一応、コミュニティスケールぐらいになっており、両方混じった形になっています。機械的に近い、作業上で区切られたものと、それから、意味的に区切られたものがあります。おそらく、小浦委員が指摘され

たことは、全部のエリアの調査結果を見てから、もう1度議論しないと決められません。何となくの感じで来ており、私たち委員もサンプルしか見ていない。ただ、重要な論点なので、また改めて議論させていただければと思います。これは、説明がなかったところですから、却って良かったと思います。
あと、寺社の重要建造物のことについて何かございますか。

○委員：調査の対象範囲を少しお聞きしたいです。最初に、範囲を丸で囲んだ地図があり、それから、個別のエリアの調査結果をいただいております。今回の調査は、コアだけではなく、その周りをどうするかということも含めてのものだったと思います。そうすると、金閣寺などの世界遺産の場合は、バッファゾーンは入っていないといけないと思いますが、バッファゾーンのラインが切れています。それを、きちんと調べてあるのかというのが不安です。そして、世界遺産以外の歴史資産では、その周辺をどういうふうに捉えて、どういう範囲を調査されているのかを確認したいです。

○座長：実際調査をされた側で、経験を踏まえて、事務局からコメントがあればいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○京都市：実際には、調査は業務委託しています。エリアごとに、その中で核となるお寺や神社と、その周辺を調べています。その周辺がどの範囲かというのは、京都市の景観政策課と風致保全課の許認可を担当している職員と、業務を委託したコンサルタント事業者とで、事前に、調べて欲しい範囲や、気になるので調べて欲しい点を、個別に打ち合わせをし、その部分をコンサルタント事業者に調べていただいています。このため、根拠を持ってというよりは、実務上、気になっている範囲や関連性のある範囲を中心に調査をしているのが実態です。今回、金閣寺の中で、世界遺産のバッファゾーンの線が入っていなかったのですが、世界遺産のバッファゾーンで、市街化区域については、一定重点的に、気になるところは調べております。

○座長：時間が押してきているので、次の議題に移りたいと思います。景観重要建造物の指定候補の資料で、例えば1ページは寺社263番、2ページ目は285番など、番号が飛んでいます。全部で幾らぐらいの寺院・寺社が調べられており、これは、その中の一部を挙げているのですか。今回の調査で、現実にどのぐらいの寺社があり、そのうちどのぐらいの寺社を調べているのかという、基礎的なことを少し教えていただけると。

○京都市：神社と寺院、合わせて636件です。

○座 長：636 件のうち、寺院と神社の内訳は幾らですか。それらについて、今回出されているような資料が全部そろってくると、解釈していいわけですね。つまり、この表が 636 枚集まると考えていいですね。

○京都市：はい。

○委 員：資料 3-2 も 3-1 もですが、まず、基礎情報が十分ではないので、しっかり調べないといけないということもありますが、まず何が重要かというのをわれわれが分かった上で、その情報がこの調査票に記載されていないと意味がないと思います。その際に、景観重要建造物としてどういう項目を重要と判断するのか。歴史性であるならば、歴史性という項目に関しては、すべてきちんと書かれていないと、本当に重要かどうかの、候補の判断ができないと思います。その辺はいかがですか。

○座 長：本当は、景観重要建造物に指定できそうなものをリストに挙げ、具体的に指定するに当たっては、美観風致審議会の小委員会で 1 件 1 件議論していくこととなります。ただ、たくさんある中で、候補としてここで選んだ際にスクリーニングが行われているので、それについての基準をお示しいただいたほうが良いと思います。いかがでしょうか。

○京都市：寺社全部 636 件を調べており、これは、ある意味悉皆に近い基礎的な調査です。まず、どういったお寺・神社があるのかを把握しようという調査です。実は景観上、お寺・神社が京都の景観の中でどういう位置づけになるのかも、私たちはまだ認識を持っていないため、まず、どういうものがあるのかを調べています。私もまだ全部は見えていないのですが、その何百かを見た中で、必ずしも全部が景観重要建造物にならないだろうと思いました。それでは、どういったところが景観重要建造物になるような観点なのか。どういったところが景観的に評価できるのかというのを、検討会でご議論いただきたくて、お寺・神社を 20 個ずつピックアップしました。まだ、私たちも全部を精査して分類できていませんので、大まかな形のものになっています。

○座 長：身近なものを入れると、大変たくさんあります。例えば京都大学桂キャンパスのすぐ近くに、三宮神社があります。この神社は、本当に小さいですが、その境内は全部、周辺の人々の駐車場になっています。

○委 員：それで、先ほどの質問ですが、どのくらい調査に入っているのかということです。今、京都市に景観重要建造物は幾つあり、さらに指定候補としては、「京都を彩る建物や庭園」から挙がっているリストもあります。どういう仕組みで、今、

幾つ登録しているかも大事な話ですが、ここに挙がっている指定候補がどういう位置づけにあるのかが、説明を聞いていると段々分かりにくくなっていく。

例えば、世界遺産に暫定リストがあるように、景観重要建造物暫定リストというのがあるのもいいと思います。他の、「京都を彩る建物や庭園」との関係もきちんと説明した方がいいです。

○座 長：確かに、それが本当に聞きたかったことですが、どうも全体を見ていると、そうしたものが初めにあって調査しているというよりは、どちらかという特徴的なものを取り出して、考えるときの指標を、今、考えたいというような形になっており、順序が逆転している。基準を決めるために、実態としてどうなっているのかというのを見ているという方が、実相に近いと思います。

○委 員：今の議論で大事なものは、大庭委員がおっしゃったことだと思います。景観重要建造物は、必ずしも文化財的価値で指定するものではありません。だから、文化財価値とは違う景観的価値を、京都の、ここで言う歴史的景観の保全という方針において、どう設定するかということだと思います。町家でも、今指定しているものは、別段、文化財価値で指定しているわけではない。京都の町が、今後とも、ある意味変化しつつも、歴史的な重層性を維持しながら、京都らしい歴史的な重層性を未来に向けてつないでいくという意味での、歴史的資源としての町家です。その指標になるような町家は、最低限頑張って、歴史的建造物などに指定しながら、みんなで気を使いましょうということだと思います。

神社・寺社の話は、町家と違って、大変生活に近いところと、そうではなく、神社界というような業界の中の格付け、文化財とは別にある格付けがあります。そうした中での歴史性が、その場所にある意味など様々にあるような気がします。おそらく、文化財的価値とは異なる寺社の価値について、京都の歴史的景観保全という意味で言えば、寺社が存在することによって、見えるものとしても歴史性の意味が分かり、かつ、周りが変化するときにも、寺社を意識することによって、何らかの折り合いがつく重層性を生み出していくといった考え方があるかと思います。

仮にそうだとすると、この調査票はこれでいいのかという問題があります。それが、大庭委員が指摘されたことで、とても大事なことのような気がします。その辺りは、もし困っていらっしゃるようであれば少し議論を。

○座 長：議論をするのは、むしろそこでしょう。例えば、宗派が入っているものと入っていないものがあったりします。

○委 員：今、小浦委員がおっしゃった、最初の方の議論は結構大事です。文化財建造物があり、景観法による、景観重要建造物、歴史的風致形成建造物もあります。そ

の中で町家というのは面白くて、町家に何の価値があるかというのは、いまだに議論しています。特徴的なことは、その評価をせずに悉皆調査をしたのです。今、京都市景観まちづくりセンターが、京町家まちづくりファンドで看板建築を扱っています。誰も町家だと思わないような建物を町家に戻せば、補助金を出すとやっているのです。それと同じように、周りが駐車場で囲まれてしまった神社も、周辺住民と神社さんが合意すれば、駐車場を少しおしゃれな境内にした方が、住民にとってもいいかもしれません。つまり、看板建築が町家に戻るように、その駐車場神社も、修景することによって、優れた環境をつくっていく資源になるということです。これは、文化財保護法や景観重要建造物ではできなかったことです。京都にはそういう種がいっぱい残っています。町家もないし、看板だらけの町か、駐車場だらけの町かと思っていたら、実は将来、ここを直せば素晴らしい、下鴨神社の社家町のようになりますよという可能性を市民に訴えることになるかもしれません。これはいいです。

○委員：それは一つあるかもしれません。結構、高度な合意形成が必要なので、まちづくり連携をしないとイケません。そうではなくても、今、大事な木が1本残っている。あるいは大事な何かが残っていて、それが、次の町、次の歴史を考えていくときの手掛かりになる。しかも、よく見えているものぐらいから始めるなどいかがですか。

そのときの選定基準として、誰かが価値づけをするのではなくて、地域から上がってくる、「京都を彩る建物や庭園」もその一つかもしれませんが、そういうプロセスを入れるなど、いろいろな方法論があると思います。

○座長：本当は、例えば歴史まちづくり法の活用の仕方みたいな問題と、非常に密接に絡んでいます。

○委員：今回が大変良い機会なので、寺院や町家とほぼ同レベルで、樹木や樹林地を扱うような、良いきっかけにして欲しいと思います。やはり日本の樹木と人との関わりは、ほかの国と比べると、神木にするなど、樹木や樹園地に意味を見いだしており、そういうところが大変大事だと思います。景観重要建造物の指定はありますが、重要景観樹木はゼロです。今回のお話の中で、付属的にたくさんあるし、天然記念物があるというのは、言っていただきました。でも、京都の歴史的景観を、本当にいろいろな視点から、意味のあるいいものにしていく上では、樹木を同じくらいの土俵に上げて、景観として京都の歴史を考える上で大事なものは何かというのを拾い出していきたい。それが単木である場合もあるし、建物と一緒にあるから意味があるものもある。そういう形で整理していただけると、今回こういうふうな点検をやった意味があると思います。

○座 長：今、議論されていたように、それぞれの文化財としての記述はあっても、景観という視点からフラットに見て、地域をどう変えていくことができるかなど、いろいろな視点が十分あり得えます。そうすると、本当は、ある程度のリストを見て、どういうものがあるのかを考えてきた上で、議論をしないといけない。限られた時間で、そのリストを変えるような構造のものを言えと言われても困ります。ただ、今日、指摘があったのは、景観という視点から見たときに、今までの歴史的な、そういう文化財的なものが、どういうふうにしてピックアップされるのかということです。そのことは大変重要で、それは京都から発信できることでもあります。その辺りで、寺社の当事者である松山委員に、一言いただいた方がいいかと思います。

○委 員：資料を見させていただいたときに、これで結局どうするのか、何がしたいのかが、いまいち伝わってきません。今あるものを、そのまま保全するためにするのか。もしくは、もっと積極的に、その地域のカラーをつくっていくのか。分けた方がいいと思います。出世稲荷が大原に移ってしまって、境内地が全部なくなったというような事例に関しては、今あるものをとにかく残すというのが、最重要課題だと思います。ただ、例えば妙心寺では、境内のパブリックのエリアは、松しか植えないという不文律があります。逆に東福寺さんは、モミジがあります。天龍寺さんは、つくられた和尚さんが好きだった桜というイメージがあります。この前、雨の被害があった直後に南禅寺に行ったのですが、南禅寺も結構松が多いです。でも、松は大変お金が掛かり、掃除も大変なため、これからは松は植えずに全部モミジにしようと思っているという話をされました。そうして、南禅寺がモミジばかりになると、おそらく周囲のイメージも全く変わってくると思います。現に、妙心寺は松がたくさん植わっているので、少し入りにくいです。そのため、門前に土産物屋が1軒ありません。これは、私は大変いいなと思っています。しかし、もしモミジばかりになったら、妙心寺の門前に土産物屋がたくさんできると思います。そうすると、やはりその地域のカラーが変わってしまいます。そういう歴史的な背景があるので、周りの皆さんにも、そういうご理解をいただいているというか、自然にそうなっていると思います。

そういうカラーがあるエリアに関しては、そのカラーを際立たせるような形で、周りの皆さんにもご理解いただくように持っていくというように、要は、そのエリアを発展的にしていくという方向にした方がいいと思います。先ほどエリアの話をしていましたけれども、妙心寺と仁和寺は非常に近いですが、カラーは全く違います。仁和寺は桜のイメージがあり、酒屋さんが「御室の花」というお酒を造ったり、私は御室小学校の出身ですが、植樹をするのは、やはり全部桜です。だから、地域として、「桜」というイメージができています。今あるものを守るのではなくて、それを発展的にしていくことが、もっと地域性を高めていくという方向になると思います。つまり、歴史的背景も、地域性も、今あるものを一

生懸命守っていく方針なのか、もしくは、そのエリア全体として発展的に景観をつくっていかうという方針にするのか。そのすみ分けをきちんと考えた方がいいと思います。

○座長：これは、それぞれのお寺さんに聞くと、またいろいろな話が出てきそうだと思います。事務局どうぞ。

○京都市：お答えにはなっていないで、また悩ましい現状を述べることになってしまいますが。資料 3-1 の 6 ページを見てください。これは、全体でも述べましたが、現在、景観重要建造物の指定に向けて議論している、上御霊神社です。まず俯瞰して、大きく緑と、その中にある社との関係があります。これを、もう少し広く見ると、この近くにまとまった緑はあまりなくて、もう少し東に行ったら鴨川があります。このようなロケーションに、固まった緑があるというのが、まず、大きな俯瞰の視点で、どうも景観的に意味がありそうだなと考えます。

次に、道路上に降りた視点として、写真 A, B, C, D, E があります。神社の周りに道路があり、西側道路の中央辺りから左側に道が伸びています。その道では、写真 A のように、ちょうど通りの正面に鳥居が見え、参道につながっています。そういうような地形の構成も見受けられます。

そうすると、この参道沿いにどういう町並みがあるのかということも、読み解いていけないといけません。そして、この場所に立ったときに、どういうふうな、神社とその周辺の建物があるかも見ていけないといけません。ただ、残念ながら、景観上、さらに深める視点が、まだ見つかっていません。

それから、境内に目を向けますと、社の履歴ということは、文化財担当部署とも協力しながら分析をしています。さらに、樹木もいわれがあります。樹木と、そのお寺の中での位置づけ、意味づけもあります。それも、分析的に調査していく中で、分かってきたところです。これ以上に、新しい視点、特に景観上の視点は、まだ十分に方針として書き留めていません。その辺りのお知恵を、まずはいただきたいと思います。

○座長：分かりました。それと、思い出したのですが、もともと神社ができる場所とは、生態学的に水の要衝であったり、環境保全の役に立っていたりという場所でもあります。そこに、神社が立地していることの、エコロジカルな側面まで踏み込んでいけないといけません。そこの自然環境と人間との営みが、どういうふうに関わりあっているのかということです。それは、景観上、大変重要な視点になるので、単に写真で緑が見えるかどうかというだけではなくて、結構深い議論がいろいろあるかと思います。

今日は、議題が 2 つぐらいありますので、この議題についてはこの辺にして、貴重な意見をいろいろありがとうございました。ここで 10 分間休憩を取り、再開

は3時30分少し過ぎをめぐりよろしくお願い申し上げます。

—休憩—

- (3) 議題 4) 歴史的景観の保全に関する課題と各課題への対応策
5) その他

ア 配布資料の「4-1. 「現状と課題」の整理と「対応策」の検討」
「4-1. 現状と課題の整理」の内容を説明（京都市）

イ 案件について下記のとおり質疑応答及び討論

○座長：それでは、今までの、世界遺産のバッファゾーン、山麓部の問題、市街地の問題、地域類型別の課題。そして、事務局の方で整理していただいた、景観の構成要素別の課題が7つ。この点について議論ができればと思います。特に景観の場合は、各構成要素に分けていくという課題もありますけれども、同時に要素間の関係の問題、さまざまな関係性があると思いますが、その辺りがあまり表に出てきていないようなまとめになっていると感じます。

併せて、資料1「これまでの主な論点整理」も参照し、かつ資料4-2で整理されたことを踏まえて、何かご意見やご質問がございますでしょうか。

○委員：まず、資料4-2の2ページ目の、世界遺産のバッファゾーンのところです。大事な考えだと思うので、重ねて言うことになるかもしれませんが。特にこのようにバッファゾーンになっている森林については、森であり続けることが景観として大事だということと同時に、寺社の建て替えのために使う木材を供給する場だとか、五山の送り火のときの松の材料を、伝統行事を維持するためにずっと供給し続けています。鞍馬の火祭りも同じです。そういう形で、持続的な木材生産や資源利用の場であるということも、きちんと位置づけていただくのが大事です。一律に、森林は伐採してはいけない、樹木は切ってはいけないということだけでは、本来の世界遺産のバッファゾーンとしての意味が十分ではないと思います。

次に、6ページの、山麓部にある歴史的資産とその周辺のところ。先日、大原の住民の方とお話をしていましたら、「景観計画」などの規制や計画を大原の中で適用すると、あれだけ広大な場所で、限定的な場所にしか家は建ててはいけないため、1つの建物の面積が小さくなってしまいます。しかし、本来、山間部や農村部の景観と、都市の中での土地の使い方は大分違うはず。都市を中心に規制の枠組をつくっていると、それを農村部に適用した場合に、合わない形での規制や計画を強いることになるかもしれないという懸念を持ちました。その辺の点検をいただきたいです。また、今回の事例で大原と鞍馬周辺がありますが、京都

市全体を見れば、北山林業の中川地区や広河原など山間部にはさまざま大事な歴史的景観や集落があります。そのような、あまり法律の網掛けがないけれども、大事な集落や歴史的な景観を、特に山間部をどうしたらいいかということについても、今後の検討として持っていただけるといいなと思いました。

次に、10 ページでは樹木について意見を反映してまとめてられています、「緑」と言った場合は樹木だけではなく、河川や用水、水辺などいろいろな自然の要素も含まれます。特に緑地といった場合にはそういう定義だと思います。そうした自然の要素の大事な部分を全部落とさないような形で、再度、チェックをしていただきたいと思います。特に11 ページで一体感のある緑を捉えています、松なのか、桜なのか、紅葉なのか、あるいは河川沿いに多いニレ科なのかというように、樹木のまとまりでも、その場に応じた様々な顔があり、歴史的な背景があります。緑としてまとめるのではなくて、上賀茂神社や青蓮院の事例で「クスノキ」と書いているのと同じように、具体的にどういった緑なのか、どういうふうな背景を持った緑なのか、一緒に併せて見るといいなと思っています。

最後に、18 ページの公共施設のところです。現在、例えば京都市の中での嵐山での大きな河川整備だとか、それから鴨川でも河川整備の予定があると聞いています。国から市レベルまでの公共事業で、非常に自然環境としても景観としても大事な部分が、場合によると一律で非常に大規模な公共事業の中で大きく変わってしまう可能性があるような計画が進んでいます。すでに担当者の方は対応していただいていると思いますが、改めて、こうした公共施設の問題において、土木部門など他の行政とも連携していただいて、守るべき景観をきちんと守っていただくよう、重ねて申し上げます。

○座 長：大事な指摘をいただきました。特に最後の公共施設については、京都市だけでなく国や京都府などいろいろなところが関わってくる問題です。松山委員、どうぞ。

○委 員：2点あります。まず1点目は、街中にある神社仏閣の樹木についてです。天然記念物がある青蓮院さんなどを見て、これは大変だろうなと思っていました。理由が幾つかありまして、まず、こういう大きい木は天然記念物とかに指定されると、なかなか切れません。しかも、大きい木が多い。そうすると、例えば台風の時などに、枯れ枝が折れて落ちてしまう。下に子どもたちがいて、それだけでがをしたら誰の責任になるのかという、もちろん、その寺社の責任になります。だから、切らないといけないけれども、自分たちでは切れにくい高さになっています。クレーン車を呼んで、切ってもらおうということになります。そうすると費用も大変掛かります。かつ、私の寺はそういう不即の事態の備えて保険に入っていますが、そういう費用も掛かります。かつ、落ち葉が大変です。昔は焼却炉で燃やしましたが、今はもちろんできなくて、その落ち葉を置いておく場所も要るし、

処分する費用も掛かるので大変だと思います。指定して「守ってくれ」というだけではなかなかご苦勞も絶えないと思います。経済的基盤のしっかりしているところならまだしも、街中の神社にそれを求めるのは相当きついと思います。だから、そういうところには、やはり維持管理の補助がないと厳しい所も多いのではないかと思います。また、クスノキはいいですが、桜だと毛虫も大変です。そうすると、近隣住民の方から苦情なども出ると思います。もし何か天然記念物などに指定するのであれば、そういうところまで考えて、維持管理の面に対しての経済的基盤がしっかりしていない施設に対するこの補助などをしていただいた方がいいのではないかと思います。

もう一つは、ここには出ていませんが、私は農地はきちんと考えておかないといけないと思います。広沢の池のエリアは風致地区になっています。最近、市民農園が非常に盛んで、どこでもすぐにいっぱいになってしまいます。農業を趣味でされる方にとっては、「借りているので好きなものを植えたらいい」と思われるかもしれませんが、例えば、あのような歴史的景観の所にチューリップ畑ができたら、やはりおかしいです。だから、その地域に合った農地の利用ということに関しても、全部はしなくていいにしても、主立ったエリアでは考えていった方がよろしいのではないかと思います。

○委員：今、農地の話が出たのでお話しします。京都市の産業観光局農林部が、市民農園を今から 20 年も前にしています。その後、現在ではマイファームという会社が、その市民農園の経営などを上手にされていますが、京都市が始めたときには園芸広場と農芸広場と分けていました。その時は、農地の所有者に組合を作ってもらい、その所有地を京都市が補助金を出して市民農園に整地して、農業指導や道具の管理もしてもらおう。だから、ここは農地、ここは園芸として作付けをした経緯があります。最近どうなっているのかは知りませんが、何らかの作付けに関しても、農地の保全に対して一定の補助などが必要です。

嵯峨野などでは、作付けに関しても非常に厳しい方針があると聞いています。世界遺産の中でバッファゾーンに入っていると、当然、何を植え付けるかということも管理の対象になります。より根底的な問題として、いつまでも水田が続かないことは明らかなので、耕作放棄地をなくすために、水田を畑作に転換していくときに、どういう作物ならいいかということも、今のうちから議論しておく必要があるだろうと思います。

そして、一番言いたいことは、7 番目の公共施設です。資料 18 ページの事例では、高速道路と無電柱化の話ですが、京都市では建設局が『京（みやこ）のみちガイドライン』というデザイン指針を持っていて、その中には、もちろん歩道や、ガードレール、照明も出ています。それらは、景観政策課が直接担当にはなりません。京都市全体では景観に配慮している公共施設のガイドラインがいろいろとあると思います。まずそれを、「道路の場合はこのガイドラインがある」、これ

は国が事業主体だからかかりにくい」など、一旦整理してみてもどうか。パブリックスペースである街路空間で何かしらそうした公共施設は写真に写ります。また、当然、バッファゾーンの中だから景観に配慮したり、それ以外の所でも歴史的建造物や町並みに合わせるべきだという議論もありますが、逆に、その歴史的建造物があって、街路空間をこれだけ整備したから、周辺の建物も一定、配慮してもらおうという方法もあります。つまり、「こんなに京都市が税金を使ってきれいに道を作っているところで、このガイドラインは守ってもらわないと困るよ。マンションの方も、当然、合わせてね」という市のスタンスを示すということです。当然、御池通にあれだけお金を掛けて空間を作れば、やはり、ショーウィンドウもきれいに飾らないといけないかなという気になります。そうして誘導する方法もあると思います。パブリックスペースにおけるデザインガイドラインを整理して教えていただきたいし、また、市民にも分かるようにしていただきたいです。

重要なものに、街路樹があります。街路樹は、どうなっていますか。緑のマスタープランや、2段階剪定など、京都市は街路樹に関して相当蓄積があって、地区や通りごとの樹木などがあるのだらうと思います。京都市では、街路樹は何種類ぐらいありますか。10種類ぐらいはありますか。

○委員：10種類はあります。

○委員：そうした街路樹と都市景観、歴史的景観がどう調和しているかということも、分かる範囲で結構ですが調べることはとても重要だと思います。

もう一つ重要な指摘があったのは管理の問題です。街路樹はほとんどを市が管理するため、2段階剪をして周辺の住民に落ち葉の迷惑を掛けないようにしていますが、民有地にある緑が、当然、問題になっています。一つは、古都保存法による歴史的風致特別保存地区、それから、一般の風致地区に普通の住宅地の中の緑があります。今、割と問題になっているのが、空き家です。空き家の樹木は、当然、剪定しませんので、木が生い茂ってきて建物を壊してしまいます。

京都はまだ古都なのでいいのですが、地方にいくと文化財建造物や景観重要建造物でも管理が行き届かない所があり、およそ、まず剪定をしていません。だから、落ち葉が樋を詰まらせたり、屋根の上に積もったりします。その積もった所にコケが生え、水がたまり、それが雨漏りの原因にもなります。そして、建物のケタが腐ることから始まって、様々に劣化していく。じわじわと、京都では少なくとも空き家では起こっています。それがやがて町家の一部で起こり、やがてお寺で起こり、やがて京都をむしばんでくるとことも事実です。街路樹もそうですが、民間が所有している樹木をどう管理するかという点で、何か仕組みを考えないといけません。

私も父が亡くなったので実家の管理をするようになりましたが、幸い母が庭師を呼んでくれたので良かったのですが、これを自分がすることになれば、いつ直し

て、どこの植木屋に電話をして、いくら払うのか、私の給料から払うのかなと思うと途端に頭が痛くなってきました。そういう管理上の問題があり、このままでは膨大な京都の庭園は、内側から崩壊してくるのかもしれないという恐れを感じています。

緑のマスタープランがより細かなものになり、市民のみなさんと一緒に管理できるような仕組みが今後必要になってくる。それは、京都にはまだ膨大な量の緑があることが大きな原因だと思います。

○委員：今のことに関して、一言だけいいですか。例えば、膨大な街路樹や緑の管理で、出てきた落ち葉などを単にゴミや廃棄物として位置付けたら、コストも掛かるし、関連する人も嫌になります。少し前までは、落ち葉は腐葉土にしたり、剪定したものは、たきつけに使っていました。昔に戻る必要はありませんが、新しい循環型の社会ということを考えてときに、きちんと資源として位置付けて、京都市の中でもそういう試みをしているとは思いますが、まだ十分にそういうのが浸透していません。やはり落ち葉なども資源だという形で位置付けていただくのが、これからとても大事になっていくと思います。

○座長：例えば大原でも、鹿が山から降りてきますが、その原因は、結局、森林の間伐がなされず、日が通らなくなり、結果として下草が生えないためです。都心部の空き家の場合でも、猫屋敷と呼ばれるような崩壊しかかっている家で、ボウボウと緑が生えているなどもあります。その辺りの緑の管理の問題も出てきて、いろいろと複雑です。他の委員の方、いかがでしょう。

○委員：この整理の仕方は、フラットな感じがします。どういう意味かという、本当は地域ごとに持っているポテンシャルが違う中で、例えば同じ寺社の保全のようなことを、フラットに議論しようとしている感じがあります。ただ、そうした地域性などを、この列の中に入れるのはどうかという気がします。

今ここで議論していることは、要素にしてもテーマにしても、かなり制度的枠組みの中で見ているような気がします。それとは別に、いかに地域性のような概念、あるいは地形風土的な環境性というか、場所の特性を、どこかで入れるのが京都らしいのではないかという気がします。

それをどうしたらいいかというのは難しいけれど、資料の並びだと、なんとなく違う感じがします。例えば資料 4-2 の「1 地域類型別の課題」や「2 景観の構成要素別の課題」にそういう議論を入れるのではないような気がします。特に 2 の方は、どちらかという制度的な要素分解の仕方をしています。先ほど「つながり」や「関係性」という話もありましたが、個別要素の関係も地域のコンテクストになるような整理の仕方。地域で長く積み重ねられてきたことを、どういうふうに景観を評価するときの手掛かりにするかという視点が、今、1 番、京都の景観

づくりに向けて抜けているところだと思います。

例えば、バッファゾーンにおいては景観法や都市計画法で対応していると言われますが、京都はほとんどが都市計画法で対応しています。景観法は使っていないと言ってもいいくらいだと思います。要するに、景観地区を使っていますが、景観地区は都市計画法の枠組みで動くため、「建築しか対応できない」とかいう議論になるのです。

景観計画では南部の方も含めていますが、それは、いわゆる大きな変化に対して、規制で調整するような側面があります。いわゆる景観計画が持っているポテンシャルを十分に使う気がないのではないかというのは、1回、聞いてみたいと思います。つまり、景観計画をきちんとつくってはいるけれど機能していないというところがあります。景観地区という都市計画の手法でしようとする、どうしても建築、工作物しか対象にならない。都市計画の枠組みは建築基準法と連動している、そうしたフレームになってしまいます。しかし、景観計画では、農地での物品の体積の問題も、土地の改変も、夜間照明も、手を加えるほとんどの行為は、本気になれば届出の対象にできるわけです。

ただ、規制できるかどうかは次の問題としても、変化を把握することは第一歩だと思います。知らないうちに何かが起こっていたというのではなくて、少なくとも何かが起こることは分かるというのは、まず第一歩だと思います。それを次、どうするかというのは、基準だけで何か良くなるわけではないし、みんなのパワーでしかないです。先ほど、維持管理の話がありましたが、人が生きていく中での変化はたくさんあるでしょう。生物も、生きていく中での変化がいっぱいあるわけで、そこは基準だけではなかなか難しいところがあると思います。完全に守るといえるときには基準でもいけるとは思います。一定、変化しながらいい線をいくというときには、これまでは文化や伝統、その地域の中での不文律などが生きていたけれども、そういった寄りどころを持つのが難しい中では、これまでとは違う、そういうようなものが要るのではないかと思います。

今、どうしても京都の場合は、建築物といった物単位で考えてきていると思います。建築物とか、工作物とか、樹木とか、京都は「もの」の凄さがあるので、物単位で考えてきている。景観においては、そうしたものが大きな力にはなりませんが、地域ごとに特性があり、風土から生まれる価値観などがあり、景観計画にもきちんと地域性は書かれています。しかし、都市計画的運用では基準に対して丸バツになってしまうため、うまくこの景観計画の方針を運用できずに困っていらっしゃるのも大変よく分かります。せつかくこういう調査をするのだから、次への転換点としてこうした調査、せめて世界遺産のバッファゾーンのところで、次の一歩の試みをしませんか、という提案をしてみたいと思います。それが、2点目です。

もう一つは、やはり周辺部で人口が減少し、産業的、地域的にもしんどいところも出てきています。そうしたところへの働きかけを景観ではうまくできないか

もしれないけれど、何かを動かす手掛かりにはなるかもしれないと思います。空き家の話は、今、全国的に問題になってきていて、さまざまな制度が住宅局ベースでは作られてきています。空き家をどうするか、公共事業をどうするか、個別に、制度があり、財源がついていると思います。しかし、景観の議論だとそれらをまとめるような、そのためのプランニングが要るのではないかと思います。

全部をするのは大変なので、大事なところ、あるいはみんなが頑張るところなど、特定の場所でもいいと思います。空き家の議論は、管理ができなくて汚くなり、崩壊してきて危ないから撤去しようという流れが多いです。でも、本当に撤去していいのか、あるいはそうなる前に気が付いたときに何かできないか。空き家でもいろいろな段階があると思います。そうすると、「空き家」、「危なくなる」、「撤去」という流れではないプランニングもあると思いますので、ツールとしては様々なものが出てきますが、それをどこで、どういうふうに、どう使うのか。それは景観でも同じで、ある程度変化してもしようがないところと保全を頑張るところなど。これからある程度の取捨選択が必要になってくるときに、先ほどの地域性や、それぞれの資源が持っている力の生かし方。私はやはり、京都の場合は、地形風土や歴史などの上にあったところの力が、とてもあるように思いますので、それを生かしていくことと、今持っている制度的な良さをうまくつなぐプランニングというような視点で考えて欲しいと思います。

○座 長：ありがとうございました。メモを見たときに、資料 4-2 では 1 番が大まかなゾーン分け。2 番が構成要素。その間に、エリアの中でさまざまな要素の組み合わせなど個別の問題があるはずです。景観としてのエリアのまとまりの中にある関係性やシステムというその問題が、こういう形に分けてしまうと落ちてしまいます。せっかくエリアごとに見ているのだから、それぞれの要素の組み合わせ、あるいは要素の切り方自身も少し見直して、もう一度エリアごとに見てみる。京都全体とか、山裾部とかは大き過ぎるので、もう少し小さなエリアで見ようとしているのに、そのまとめの部分が落ちてしまっているように思います。この点は事前説明でも指摘しました。

○委 員：先ほどの小浦委員のご指摘にあった物単位というお話も確かにそのとおりでなと感じました。それに関して、前回の美観風致審議会の専門小委員会での議論を紹介する形で幾つかお伝えしたいと思います。前回の小委員会では、御霊神社の検討をしました。御霊神社の辺りはもともと道路際に緑が非常に密集していて、その緑があるということで景観上はいいと取り上げられていましたが、それだけではなくて、京都にはもともと都市林というものがあつたということをお伝えいただきました。先ほど、深町委員にも教えていただいたのですが、例えば防災上重要であったり、環境上の位置づけがあつたなど、京都にもそういう都市林があつたと。その中に位置する御霊神社だから重要だというご指摘がありました。つ

まり、単体としての神社がそれぞれ景観上重要だということだけではなくて、何か大きな緑の塊がもともとあり、それを復元しようという形で位置付けていくこともあるのではないかと思います。

それから、今、いろいろな要素が挙げられているのですが、これをいろいろ議論して、制度を使って公の立場から何かをしたとしても、それをどううまく運用していくかが重要だと思います。それは、どういうふうに住民の方々に理解していただいて動いていけるかということが重要だと思います。そうしたときに、例えば、この神社の緑を基点にするのであれば、神社は、だいたい祭礼を持っている、祭礼で地域の中を巡ることがあるはずです。ここ20年ほどで文化財の分野では、祭礼などの無形のものが非常に重要だということが認識されてきたと思いますが、祭礼というのは無形の行いが大事というだけではなく、場所との関わり、地域との関わりの中でも重要なので、そういうものが見えるようにすることが大切です。例えば、今、界わい景観整備地区として地域指定の制度があり、景観上の意味を重視していますが、それだけではなくて、何かを作っていくときの1つのツールとして、地域指定の新しい何か切り口として使えるのではないかと思います。

○委員：私からは1点です。資料4-1における『現状と課題』についてです。その中で、例えば「2 景観の構成要素別の課題」における「課題」の欄に、どんな構成要素があるのかやデザインがどうなのかなどが挙げられているのですが、例えば空き地や駐車場はないと困るようなところもあるので、それがどの程度必要なのかや配置はどうかということも当然検討していくべき課題です。それは、周囲の歴史的建造物や資産との関わりの中で重要な問題としてあると思いましたので、建物を含めて課題として考えていく必要があるというのが1点です。

関連して、構成要素は、おそらくこれだけではないと思っています。これ以外にも、例えば、当然そこに関わってくる人々、地域やコミュニティというのも当然ありますし、そういう方々がその地域をどう考えているのかとか、近くにある寺社や近代建築物にどう関わりを持っているかということも、現状や課題の中で考えておかなければいけないことで、しっかりと把握していく必要があるのと思いました。

また、全然違うことですが、この資料の中で蔵が滅失するというものがありました。問題だとして挙げているのであれば、蔵は検討しなくていいのかと思いました。今回、重要な建造物の中で、こういったものの方が今、危機にさらされているようでしたので、そういうことも併せて考える必要があると思いました。

○委員：さきほど言ったことですが、類型別の課題に関しては、京都市の景観政策の真価とも関わることなので、これからどういうフレームでこの課題に対応していくかということを大きく考えた方がいいと思います。昔から京都市が取り組んでい

る山麓部にある歴史的資産に関して、仮にそれがバッファゾーンであっても、あるいは歴史的風土保全区域であっても、所有者に伝わっていないとか、森林の劣化の問題などがある。

それから、市街化調整区域の中では、郊外の農村で、かつ歴史的な、大原のような遺産があるところに関して、一般的には景観法と連動する文化的景観という文化財保護法の制度で農村景観を守っていくというフレームがあります。その場合、景観計画を重要地区に指定されていることがその選定の条件になりますが、都市型の景観計画と農村部では合わないという指摘がありました。そう言われると、重要文化的景観に選定されているものは農村景観が多いのですが、どんな計画で守っているかということも、非常に気になります。ほとんどは、保存を前提としていると思います。これに関して、大原の農村がどう計画していけばいいかという議論があります。もっと広く使いたいという気持ちは分かる一方、これから過疎化が進んでいく中でどうコンパクトに小さな拠点を作っていくかという議論もあります。その辺でどういう生き方がいいかということは、より都市計画的な総合的な手法で考えていくということが必要になるでしょう。

また、墓地も気になります。だんだん景観が整備されてくるとお寺さんが持っている墓地が目につくということもあります。このご時世では、20年、30年経つと、日本国中の空き墓地化が大問題になってきます。いくら京都といえども荒れていくだろうという状況の中で、バッファゾーンの中でも荒れ墓地が目につくようになってくるというのが、おそらく十数年後にはどこかで起こってきそうな気がします。

さらに、指摘があった土地の売買等に関する情報をどう入手するかについて、所有者の方とどうやって連絡を密にするかという課題があります。そもそも「京都を彩る建物や庭園」の制度も、取りあえず市民の皆さんに推薦していただき、文化市民局から連絡がいった、名刺交換から始まってやり取りをし、その後、例えば景観重要建造物になるのであれば景観政策課につなぐというパイプができています。このツールの検証は必要です。なぜ伏見では漏れたのかとかいうこともきちんと検証しなければいけないし、例えば梨木神社や出世稲荷の場合は制度発足の前でしたが、どうしたら防げたかという検証はしておかなければならない。今までは、それをゆっくりしていけば良かったのですが、京都の町家や社寺などのデータベースが整ってくると、「何のためにデータベースを作っているんだ」、「せっかく作ったのに市役所がそれを売買することを知らないのか」、というような状況に追い込まれてしまいます。だから、これに関してどういう情報共有の仕方があるかということだと思います。

今日、初めてこの景観重要建造物の指定候補を暫定リストのようにして作るという意見がありましたが、公開がどこまでできるかも考える必要があります。「京都を彩る建物や庭園」はリストが公表されていますが、今回のリストは、当然近代建築物も社寺も市民に推薦もされていないため、リストに挙げる根拠が少し薄

弱であり、まして公開することに関してはかなり抵抗があります。この場合、京都市としては、所有者に対して、景観重要建造物の指定候補として考えている旨を伝えて、もしリストに載せることを了承してもらえるのであれば、そこで情報交換できます。だから、何かそういう仕組みを考えることが大きな対策になります。大掛かりな進化する景観政策を進めていく以上、次のステップとしては、そういうことがあると思います。

最後、土地の売買とは書いてありますが、「相続」は言わなくてもいいのでしょうか。結構、相続も大事です。さらにこのことが農地の問題に関わってきます。生産緑地の指定など森林にも当然関わってくるとか起こります。所有者も個人だけでなく、企業の場合もあります。その場合どう捉えるかなど、課題がクリアになって次の対応策を考えると、事務的にも、いろいろな役割を景観政策が担わなければいけないということが見えてきます。

そういう意味で、このエリアを拡大し、対象を増加させてきた過程で広がってくる景観行政の役割が見えてきたような気がします。

○座 長：結局、神社も寺も京都が持っている資産です。しかし、どういう資産をどれだけ持っているかは、普通の人々はあまり気付いていません。だから、公開をするかどうかは別にしても、やはり京都の中にある資産を拾い上げて、それを丁寧につなぎ合わせていくということになると思います。

そのときに大事なのは主体です。誰のために、誰が、という問題があります。例えば、大原でも、結構、上賀茂の人が農地を借りています。上賀茂には農地が少ないので、大原の農地に仕事をしにきている人がいます。そういった「誰が」という主体の問題を考慮に入れていかないといけない。

そうすると、景観といっても、誰がどんな生業を営んでいるのかという問題を追及していかないと、景観を保全する問題が解決しないのです。行政が担うにしてもお金の限界が当然あります。公共セクターだけでなく、民間セクター、コミュニティセクターまで含めて、さまざまな主体の協働の形を一緒に考えてデザインしていかないと駄目な感じがします。

空き家の問題でも、例えば修徳学区で実際に調べると45軒程あるのですが、やはり、コミュニティの人というのは、各空き家について、誰がどこで持っていて、どういう関係なのかを全部知っています。9割の所有者が特定でき、所有者アンケートやインタビューができています。コミュニティベースでないと手に入らないような情報や使い方があるわけですね。そういう意味でも、主体の問題は、同時に入れていく必要があると思いました。

○委 員：今、主体の問題が出たので少し聞いてみたいと思います。今、京都の人口構成や流動はどうなっていますか。例えば芦屋の場合は、阪神淡路震災の後8年で人口の半分が入れ替わりました。そうすると、ここがどういう場所なのかを伝える

のが大変難しくなり、しかもゆっくり変わっていくときは元の人から次の人に伝えられますが、急激に変わると元の人から疲弊し、伝えきれなくなっていくということが起こります。

人が入れ替わるのは都市なので当然ですが、どうやってその場所の暮らしなりを伝えていけるのか。景観でも、変わることを前提にしたときにどうすればいいのか。それは、農地も森林も一緒に、担い手が変わることを前提にしたときに、どのようにして伝えていくのかということが大変気になっています。文化的景観にしても、景観にしても、結局は人が作っているものだから、どう使うか、暮らすのか、というのが風景になります。

だから、農業が成り立たなくなったら、田園などの風景は、維持できなくなります。お金を掛けて人を入れて農業を維持して風景を守るとするのは、どうも本末転倒なような気がしています。いかにうまく終息させて、次の時代、また何年、何百年かして、農地になるときに記録が残っているというような生き方というものもあると思っています。

京都でも、人が変わっていくときに、どう伝えていくかというのは結構重要で、今はうまくできなくても、記録を残していくというのも、とても意味があると思います。保全とはそのまま置いておくということではないということは共通の認識としてある中で、いろいろな進み方があります。議論している制度論はこれだけしかできないけれども、違う方法をしたらこれだけできるというようなところではないかと思いました。

○委員：今のことに関連して、私が一番危惧しているのは、外国人の方が京都の昔ながらの庭園や町家を購入されるケースが最近結構多いことです。南禅寺周辺にある何有荘はオラクルの会長ラリー・エリソンさんが買って、今、大工事をしています。あの方は、比較的日本や京都に対するリスペクトがありますので、そんなややこしいものはできないのではないかなど期待はしています。しかし、今、京都は非常に注目されているところで、下鴨のエリアなどでは香港の方などがたくさん買っています。そして、何か「それっぽいもの」を造りたがります。石庭の中に突然、鳥居を建てたり、私たちが見ると、「なんや、これ」というようなものを作られます。「これは違うぞ」ときちんと教えてあげる人が必要だと思います。

外国の方は特に顕著ではありますが、日本人でも東京から移住してくる人がたくさんいますし、マンションも飛ぶように売れている中で、京都の風情に合った、それぞれの調和というようなものをアドバイスできるような人たちがいた方がいいのではないかという気はします。

○委員：面白い話で、イタリアでも同じことを言われました。ベネチアのカナルグランデ沿いのパラッツォを、アメリカ人、イギリス人が買いたしたときに、また、トスカナのきれいなオルチャ溪谷の農地をアメリカ人などが買いたしてきたとき

に、みんな心配しました。しかし、10年後や20年後になると、意外と、わざわざ買いにくる人の方が、イタリア人よりもきちんと再建してくれているということがありました。

大切なことは、入れ替わりが起こり、新しい人が入ってきたときに、今まではローカルなコミュニティの中で共有できていた文化や不文律を、行政用語とか行政計画など、分かるような形で示すことが必要になるでしょう。それが町式目というレベルで止まる場合もありますが、建築協定、都市計画、景観協定に続く場合もあり、そのプロセスにおいて、今、私たちは戦っていると思います。

昭和初期、私の子どもころには、お寺の住職とは大変密な関係にあり、週2回か3回は住職と会って話を聞くという状況がありました。それは祖父も祖母も同じということでした。だから、このお寺では念仏一つとっても、きちんと揃っていました。しかし、私も、その住職と40年も会っていないと、「四十九日をやれ」と言われてもどう準備していいか分かりません。納骨する時も、「念仏は？」と聞かれて「え？ なんですか、念仏」というようなことが起こります。それが、今、町並み景観で起こっているのです。これも、どのようにして戻していくか。京都では、人口の自然減は著しいけれど、社会増がありますので、人口減少がそれほど進んでいません。地方創生の議論の中で、発表された各行政区別の人口移動の資料を見ても、一定入れ替わり、残っています。京都の場合、人口146万人のうち、13万人は学生であるので、約1割は毎年のように入れ替わっています。結構、その流動が大きいところに社会増があるので、修徳学区で行っているようなマンション住民を含める方法がいいのか、もう一步進めるべきなのか。それが、都心、下鴨のような周辺、大原でも、一定社会増が起こっていて、入れ替わりが起こっていることが分かると、どういう形で景観に対する意識を共有化していくか。あるいは、受け継ぐべき景観資源、文化資源をどう継承していくかも、まだまだ工夫が必要です。京都はかなり頑張っていると思いますが、そこをどう伝えるかということを経験政策の大きな柱として立てていく。地区やコミュニティレベルでももちろんいいのだけれど、町全体としてどう捉えたらいいか。それを、幾つかのレベルの地区や通りでどう共有するかが課題になっています。

○座長：結局は、京都らしさというものを、アーバン・モザイクとして、どのように創り上げていくかということでしょう。要するに、人も入れ替わり、エリアも時間も変わっていく中で、さまざまなスケールのエリアをどうやって残していくのかという課題になるだろうと思います。それぞれのエリアで問題の抱え方も違うと思いますので、丁寧にそれを処していく形しかないと思います。そのためにも、この検討会では、委員の皆さんに調査結果の全体を見ていただいて、その上で一度議論できるといいなと思います。

やはり、御霊神社の話もですが、個別に話を聞いていくと「ああ、そういうことか」と分かることが結構多いです。でも、基本原理の話を経験の方から出して

いただいたので、その原点を忘れないようにして個別の問題をきっちり見て、議論のまとめができると、おそらく課題がたくさん出てくると思います。

今日、議論した話は次年度以降の大きな課題になりますので、今年したことは、それを考えるときの抽象論ではなくて、具体的な事例として扱ってきています。それを組み合わせて、来年度、景観や、京都らしさなど、その辺りの本質的なことの議論ができればと思います。そういうまとめを、最後、したいと思います。時間がきておりますが、これだけはどうしても言っておきたいということがありましたら、どうぞ。

○委員：生産緑地の話が出ましたが、毎年生産緑地が大変な量で、どんどん減っています。確かに農地としての機能を考えると、減るのは仕方ないとは思いますが、都市の中に水田があることの意味は、生産だけではなく、防災の意味や、それから生物多様性の意味など、いろいろあります。だから、そういうものを上手くつなぎ合わせながら、上手に農地を残していくことを今考えないと、本当にこの傾向というのは止められないと思います。

それから、古都保存法の中で京都市の土地買い取り制度があり、それなりの面積の竹林などを京都市が持っていると思いますが、それがまだ十分に生かされていないところがあります。そういうものについても、今回の調査対象地の中でもくみ入れられているはずなので、京都市として貢献できることがないかも一緒に検討いただけるとよいと思います。

○座長：京都市が持っている資源も結構あります。この間、成徳中学を見に行きましたが、和室はあるし、運動場もとても静謐な感じがあり、いいですね。そういうあまり使われていなくて残っているものが、結構、たくさんあります。階段も木できていて、手すりのそばの踏面のところがたくさん歩くために少しへこんでいるのです。あのへこみが、なんとも言えません。こうした具体的な資料をもう少し配布していただいて、それに目を通した上で次年度の課題をしっかりと出していきたいと思います。

それでは、予定していた時間が参りましたので、本日の議題はこれくらいで終えたいと思います。

本日は本質的な議論をいろいろいただきましたので、事務局においては、それを参考にしながらまとめてください。また、そのまとめの作業と同時に、まとめ方も含めて見せていただく必要があります。そして、委員の方々にもできるだけ多くの事例を具体的に読み込んでいただきたいと思います。それらを踏まえて、次年度の検討を進めていくことにしましょう。

—了—